

会長就任にあたって

寺前 紀夫

昨年末の代議員による選挙の結果、2013年度と2014年度の会長を務めさせていただくことになりました。微力ながら会員の皆様や理事各位、そして事務局のご支援とご協力の下に職責を果たしたいと考えております。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

日本分析化学会は昨年度、一般社団法人から公益社団法人へ移行いたしました。学会の定款第4条に「学会は、分析化学に関する学理・技術の進歩を図るとともに、会員相互の連絡研修を行い、もって学術、文化の発展に寄与することを目的とする。」と掲げています。分析化学に関連する科学技術の振興という公益事業を通じ、会員の皆様のさらなる発展や我が国の社会の発展に日本分析化学会が貢献できるよう務めてまいりたいと思っております。

さて、最近気にしていることとして世界の人口の推移と日本社会の高齢化があります。私が学生のころは世界人口約40億人と言われていましたが現在は約70億人、2025年には80億人と予想されています。エネルギーや食糧を始め、多くの問題を解決しながら持続可能な社会を全世界的に形成する必要があります。我国の人口の推移はというと、2009年度の統計では、第一次ベビーブームである私の生年の人口は224万7千人、第二次ベビーブームに生まれで20年前に18歳だった人口が196万6千人、現在の18歳人口が124万5千人、10年後の18歳人口が108万8千人と予想されています。世の中では若い世代への年金負担の増加がよく話されますがこれは負担割合について知恵を出し合って解決することができるかと思えます。一方、人口減少は若い世代へ活躍の場をより多く与えることにも繋がり、若い世代にとって良いことも多くなるのではと思っています。

日本分析化学会でも過去20年間、会員減少と会員構成の高齢化が進んでいます。20年前の1992年度では名誉会員と永年会員が計85名、正会員が6,783名（学生会員や団体会員を含んだ総会員数は9,107名）でしたが、2002年度には266名と5,778名（総会員数8,550名）、昨年度は307名と4,579名（総会員数6,786名）、と変遷しています。非会員の分析化学研究者や分析化学関連他分野の研究者を新規会員として迎える会員増強運動は重要です。また、学会の活動を発展的かつ円滑に進める上では、シニアの会員により活躍して頂くことと、若手や中堅の研究者、企業の研究者により多く表舞台に出て頂くことが活気ある学会とする上で重要である、と考えます。現在正会員には名誉会員と永年会員が含まれていますが職を辞される65歳以上の会員の皆様には会費を減額したシニア会員として引き続きご活躍頂くことやフェロー制度の導入など新しい制度を検討したいと考えています。このような措置をとるためにも、学会の財政

基盤をより一層強固にすることが重要と言えます。歴代会長によって種々の方策がとられ前中村会長の下で分析士認証制度などの新たな事業や事務組織の改編が進められました。公益社団法人として会員のみならず分析化学にかかわりを有する多くの研究者や技術者の人材育成に資する制度や講習会等の公益事業の推進も重要です。2013年度より年会や討論会、また会員情報管理等の事務作業のある部分が外注により行われるようになりますが、これらが円滑に進行できるよう事務局とも連携して作業に当たり、中長期のビジョンを持って学会活動の方向付けを行う必要性を感じております。確固たる財政基盤によって、各支部、各研究懇談会、また本部が主催する学術集会や講演会、講習会、技能検定、出版事業など各種公益事業のさらなる展開が期待できるものと考えます。

さて、過去10年間、中国で30回ほど講演をしましたが、最近数年間の中国の科学の進展には驚きを感じています。特に政府より国家重点実験室と認定された組織には人材や資金が集中している感じを受けます。中国の科学者が注意を払う学術雑誌のインパクトファクターや被引用回数は当該分野の研究者数に負うところが大きいので新規な研究の評価に必ずしも繋がるわけではない、と思っておりますが、中国の研究者とつき合う上では、そのような中国の物差しも考慮に入れる必要があるとも感じています。韓国では比較的新しい大学であるPohang University of Science and Technology (POSTEC) が著しい進展を見せていることを肌で感じています。日本分析化学会のアジアにおける存在感を示す上で、本会主催の国際会議の開催やアジアを始め世界の研究者との連携強化、Analytical Sciences誌のさらなる発展、国際会員や国際賞の制定など、学会の国際化も課題の一つであると思っております。

分析化学の分野は理工農医薬にまたがる広範囲な領域の中にあり、かつ産官学に属する多くの研究者や技術者によってその発展が推進されています。分析化学者同士の交流や分析化学に関連する諸団体との交流は分析化学発展の上で重要と言えます。一方、広範囲にわたる分析化学の研究が他分野の研究者に分析化学が何であるのかが見えにくい理由の一つになっているとも思われます。これを解決するには個々の分析化学研究者が進めている優れた研究の成果を他分野の研究者も交えた場で発信することが重要であり、学会としては学術雑誌や学術会議など分析化学者による成果発信の場を設けることで我が国における科学技術分野での分析化学の存在感を周知していく必要性を感じております。

解決すべき課題が山積しておりますが、会員の皆様の御理解と御協力をお願い申し上げます。